

「オンライン・ワールド・カフェから生まれる  
対話:アート×コミュニケーションの観点からの日本語学習」

寺田庸平(弘益大学校)

神吉宇一(武蔵野大学)


荻野雅由(カンタベリー大学)

守時なぎさ (リュブリャーナ大学)

小川靖子(前・国際交流基金ジャカルタ日本文化センター)

韓国日語日文学会

2021年12月18日



# 1.はじめに

## アートパラ深川

- 2020年から東京江東区深川地区で開催されている障がい者アートの市民芸術祭
- 「おしゃべりな芸術祭」というコンセプトを掲げ、芸術祭に関わるさまざまな人々の対話性を重視し、対話を通して共に生きる社会の実現を目指そうとするもの



第一回アートパラ深川大賞 / 【大賞】西川 泰弘 [春]

# 2021 Artpara

10月22日[金]～31日[日]

## アートパラ深川 おしゃべりな芸術祭

江東区 [門前仲町・清澄白河・森下]

今年も街じゅうに障がいのある人のアートがあふれます。  
ほんとうはアートを見ていっぱいおしゃべりしたいけど、  
いまは会話を控えめに感動でひととき心を解き放とう！

# 1.はじめに

## 対話型アート鑑賞 ワークショップ

- 株式会社フクフクプラスがニューヨーク近代美術館の  
アート鑑賞プログラムに着想を得て開発した  
ワークショッププログラム
- アートパラ深川のプログラムの一つとして提供

## 本研究では

この対話型アート鑑賞ワークショップの実施と  
日本語教育における効果について報告する。

# 1.はじめに

アート鑑賞に対話性を  
持ち込む事例

視覚障がい者のアート鑑賞に関する取り組み

見える人と見えない人がペアを組み、  
ことばによる対話を通じた鑑賞（伊藤, 2015; 林他, 2019）

参加者の解釈の深まりや多様性への  
気づきが生み出されると言われている（安斎他, 2018）

# 1.はじめに

## 対話

日本語教育の現状では、言語知識やスキルの習得を通じた情報伝達を円滑化することが主たる目的・目標とされがち

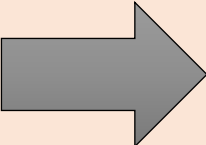
対話を通じた相互理解や相互尊重、人々の幸福の実現や世界平和の達成といったことが後景化されてしまうことが多い。

世界の日本語話者を対象としてオンラインによる対話型アート鑑賞ワークショップを行うことを通して、学習者にどのような意識の変化が引き起こされたのか明らかにすることを目的とする。

## 2.これまでの経緯

2018年から多国間の日本語学習者をつなぐ「オンライン・ワールド・カフェ」を開催

- コロナ禍による行動制限は、講義や交流のオンライン化を加速し、  
国境や所属機関を越えた交流を一般化
- オンラインでの『対話』の可能性と重要性も認識されるにつれ、  
より多様な教育実践が可能

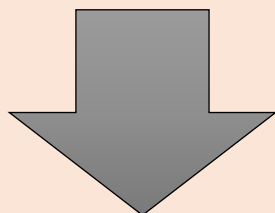


対話型アート鑑賞「アート x コミュニケーション」を中心に据え、  
障がいを持つ人々によるアートを鑑賞し、学習者や母語話者・  
非母語話者というカテゴリーを越え、日本語ユーザーとして  
参加してもらおうイベントを試みた。

## 2.これまでの経緯

従来の「オンライン・ワールド・カフェ」では

最初に短い基調講演を聴いた後、  
参加者の共通言語である  
日本語で対話を行うという形式



アートという非言語の  
視覚情報についての対話

Online World Café for Japanese learners  
Four universities in four countries

Musashino University, Japan  
Hongik University, Korea  
Tammusat University, Thailand  
University of Canterbury, NZ

Keynote speaker

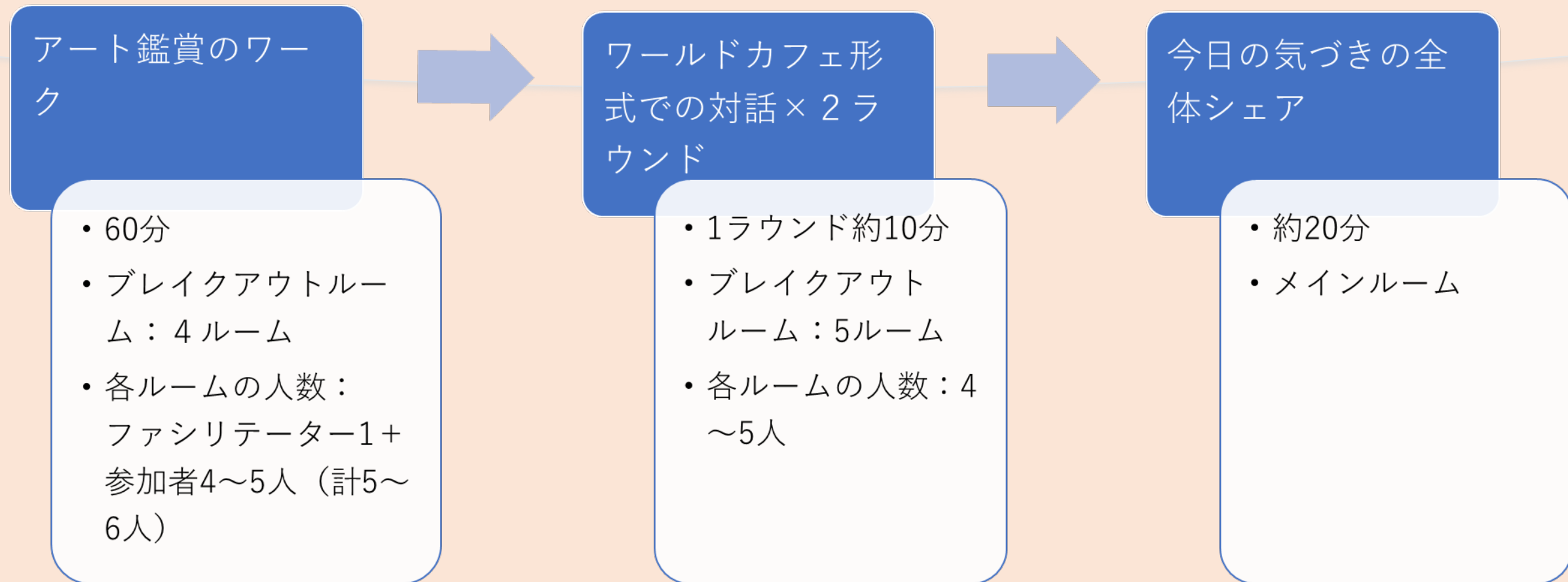
オンライン・ワールド・カフェ

### 3.実施概要

- 実施日時：2021年5月5日（水）日本時間・午後5時～午後7時
- 参加者：武蔵野大学（日本）3名、カンタベリー大学（ニュージーランド）5名、リュブリャーナ大学（スロベニア）5名、ホンイク大学・聖潔大学・群山大学（韓国）計6名、マハーサーラカム大学（タイ）2名
- \* 武蔵野大学からの参加者—日本人学生
- \* 武蔵野大学以外の参加者—日本語レベル（中～上級）の大学生
- 参加者の募集：各大学の担当教員（神吉、荻野、寺田、守時）を通じて、勤務校および他大学より参加学生を募った。



# 3.実施概要



\*ファシリテーター：磯村、高橋（株式会社フクフクプラス）、神吉、荻野

\*ブレイクアウトルームでのメンバー編成：計3回のブレイクアウトルームでは、他参加者となるべく多く対話する機会となるよう、異なるメンバー編成とした。

# どんな匂いがしてきましたか？

①



②



③



④



⑤



⑥



## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

- インターネット上のフォームを利用して作成、回答
- ワークショップの形態に関する感想、ワークショップへの期待、学び、日本語学習との関連などに関する設問を約10問
- 回収した回答数（カッコつきの数字は参加者数）  
武蔵野大学3(3)名／カンタベリー大学（ニュージーランド）3(5)名／  
リュブリャーナ大学3(5)名／韓国1(3)名、マハーサーラカム大学2(2)名。

ワークショップへの参加前後における「学び」に対する  
意識の変化をとりあげて分析

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

質問3：ワークショップに参加する前、どんなことを学びたいと考えていましたか。

質問4：ワークショップに参加して、どんなことを学びましたか。

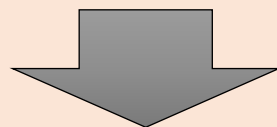
- 回答は自由記述形式
- 日本語・母語および外国語としての英語で記述
- 日本語以外の言語は、deepLを用いて機械翻訳した後、分析者が回答としての適切さを確認し、その後他の日本語の回答と同様に分析
- 分析ツール：KH Coder ただし頻度と語の共起関係を確認するために使用。

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

日本人学生の学びの変化

日本国外の日本語学習者の意見を聞くことに対する期待



参加者の一つ一つ異なる意見に対する敬意

例：素直な意見に幼稚や大人さなんてものはないのだ、と思った。  
例：みんな違う人間で意見が違うのは当たり前で、…

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

日本人学生の学びの変化

自分の意見を述べることに對する不安や恥じらいは不要だ

例：自分の意見を伝えることは恥ずかしくない、怖いことではない  
と言うことが学べた。

例：自分の考えを一度伝えただけで、ほかの人の考えを聞くことで  
より深く考えることができる実感した。

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

学びの変化の背景

傾聴→自分の意見も受容されるだろうという安心感

自分の意見を持つことに対する自信形成

個々人の意見の相違を肯定的に認識



自分の意見を持つ基盤

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

日本語学習者の  
学びの変化

### アートに関する学びへの期待

例：今まで考えたことのないようなアートの考え方、理解の仕方を見せて  
もらいたかった。

例：アートを学びながら日本語を学びたいと思いました。

イベントのタイトルが「アートx日本語xワールド・カフェ」

アートを見ながら学習言語である日本語で話すという  
イベントへの理解



## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

日本語学習者の  
学びの変化

自分の思いを述べ、他人の意見を聞く。

意見交換を通じて、多様性を学ぶ。

例：人の別々の意見や見方を尊敬することが学びました。（原文ママ）

例：アートの気持ち。同じアートを見ても誰か違う意見を持つかもしれないけど、全員の意見は大事ということを知りました。

## 4.参加者のアンケートより

-アートへの期待から多様性の尊重へ-

日本人学生と日本語学習者の  
学びの変化

日本人学生：自分の意見が受容・肯定されることへの安心感  
不安の払拭

日本人学生＋日本語学習者：  
他人の意見を聞く・理解する活動  
→多様性への尊重

## 5.おわりに

確かに鑑賞した絵に対する解釈の深まりや多様性への気づき（安斎他, 2018）が参加者の間に観察された。

参加者の間には言語知識やスキルの習得に限らず、対話を通じた参加者同士を理解したり尊重するという意識が芽生えていること

対話型アート鑑賞ワークショップを日本語教育に取り入れることによって、日本語教育は言語学習にとどまらず、参加者にさまざまな意識変化をもたらしたと言える

# 5.おわりに

## 今後の課題

対話型のアート鑑賞ワークショップでは、さらに多様な背景を持った人々に参加してもらうための方策

対話を通じた参加者の意識変化について、さらに詳細かつ縦断的なデータを得て分析すること

日本語ユーザーとして参加する対話型アート鑑賞ワークショップにおける意識変化の探求



母語話者・非母語話者・学習者・教師などという境界を越え、相互理解や相互尊重、人々の幸福の実現や世界平和への貢献につなげていくための一助となることが期待される

# 参考文献

1. 安斎勇樹・平野智紀・山田小百合・塩瀬隆之（2018）「視覚障害者との対話を通じた美術作品鑑賞の実践」『美術教育学』39, 27-38.
2. 伊藤亜紗（2015）『目の見えない人は世界をどう見ているのか』光文社新書
3. 佐藤慎司・佐伯胖（2017）『かかわることは：参加し対話する教育・研究へのいざない』東京大学出版会
4. バフチン・ミハイル（1981）桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学（改訳版）：言語学における社会学的方法の基本的問題』未来社
5. 林健太・中川美枝子・白坂由里（2019）「『見えないこと』から『見ること』を再考するー視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」『artscape』2019年07月15日号[https://artscape.jp/focus/10156072\\_1635.html](https://artscape.jp/focus/10156072_1635.html)
6. Brown, J., & Isaacs, D. (2005) The world cafe: Shaping our futures through conversations that matter. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers
7. Gergen, K.J. & Hersted, L. (2013) Relational Leading, The Taos Institute Publications, Chagrin Falls: OH,
8. 伊藤守監訳（2015）『ダイアログ・マネジメント：対話が生み出す強い組織』Discover.